



Data

監督・脚本：クリスティアン・ペッツォルト

出演：パウラ・ベアー / フランツ・ロゴフスキ / マリアム・ザリ / ヤコブ・マッチェンツ

👁️👁️ みどころ

“水の精” ウンディーネの怖い本性は、「愛する男が裏切ったとき、その男は命を奪われ、ウンディーネは水に還らなければならない」というもの。ギリシャ神話「ウンディーネ」や、アンデルセンの「人魚姫」は知っていたが、さて、そんな“怖い本性”の展開と行き着く先は？

『東ベルリンから来た女』（12年）等の「ベルリン三部作」で鋭い社会問題を提起してきたペッツォルト監督が、一転して「精霊三部作」に挑戦！その第1作が“水の精” ウンディーネの物語だ。

小説でも音楽でも映画でも、“水の精”の本性さえ踏まえれば、自由なストーリー展開が可能。しかし、ベルリン市住宅都市開発省の博物館で、巨大な都市計画の解説をしているウンディーネの恋模様とその生きざまは？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ ペッツォルト監督に注目！精霊三部作の第1作に注目！ ■□■

1960年生まれのドイツ人監督、クリスティアン・ペッツォルトは、「ベルリン三部作」とも言うべき①『東ベルリンから来た女』（12年）（『シネマ 30』96頁）、②『あの日のように抱きしめて』（14年）（『シネマ 36』53頁）、③『未来を乗り換えた男』（18年）（『シネマ 43』226頁）でさまざまな賞を受賞し、今や押しも押されぬ“巨匠”に成長した。そんなペッツォルト監督がそれまでの社会派問題提起作とは大きく異なる、新たな「精霊三部作」に挑戦！

その第1作が、日本人には“オンディーヌ”としてよく知られている“水の精”「UNDINE」の物語だ。第2作は“火の精”、第3作は“地の精”の予定だが、邦題を『水を抱く女』とした“水の精” ウンディーネの物語とは？

■□■ “水の精”は魅力的だが、実は怖い女！？ ■□■

本作冒頭、ベルリンのとあるカフェで、恋人のヨハネス（ヤコブ・マツェンツ）から「別の女性に心変わりした」と別れを切り出されるウンディーネ（パウラ・ベアー）の姿が登場する。これは TV ドラマ等にもよく登場する俗っぽい風景（？）だが、そこに登場するウンディーネのすごいセリフは、動揺しながらも腹の底から搾り出すような「私を愛しているはず。私を捨てたら、あなたを殺すはめになる。知っているでしょ」というもの。かつて夏目雅子が『鬼龍院花子の生涯』（82年）の中で啖呵を切った「なめたらいかんぜよ！」とまではいかないが、これはかなり怖いセリフだ。

始業の時間が迫っているウンディーネは、「休憩時間にまたカフェに戻ってくるので、その時には、もう一度『愛している』と言ってほしい」と言い残してその場を去ったが、ペッツォルト監督が“水の精”として描くヒロインがこのウンディーネだから、さあ、こんな恐いセリフを吐くウンディーネの物語はいかなる展開に？

■□■さすが！ベルリンにはこんな立派な博物館が！■□■

中国旅行で北京の故宮博物院や瀋陽の九・一八歴史博物館、南京の侵華日軍南京大屠殺遇难同胞紀念館等を見学すれば、日本人は誰もがその広大さにビックリさせられるはず。日本では大阪城を代表として、全国各地にお城を中心とした街づくり（都市計画）の模型が展示されているが、その規模は中国に比べると極めて小さい。しかし、本作でウンディーネが務めているベルリン市住宅都市開発省の博物館内にある、ベルリンの町を象った大きな模型を見ると、その大きさは中国レベルの立派なもの。しかも、そこでは、ベルリンの都市開発を研究する歴史家であるウンディーネが巨大な模型を使って巨大な都市計画を30分間タップリ語ってくれるのだから、価値がある。解説員のウンディーネは“ベルリン”はスラブ語で“沼”や“沼の濁いた場所”を意味します」と語っていたが、なるほど、なるほど・・・。

見学者への30分間の解説を終えたウンディーネは急いでカフェに戻り、ヨハネスの姿を探したが、既にヨハネスはいなかった。悲嘆にくれ呆然としているウンディーネに対して、水槽から「ウンディーネ・・・」と呼ぶ声が聞こえてきたが、そこに現れたのが博物館で聞いたウンディーネの解説に感激した男・クリストフ（フランツ・ロゴフスキ）。クリストフはその感激をウンディーネに伝え、お茶に誘ったが、ウンディーネは何の反応も示さなかったから、アレレ・・・。

そんな状況下、突然ウンディーネが見つめていた水槽が音を立てて揺れ始めたから大変。クリストフはウンディーネに飛びついて助けたが、2人とも水槽から大量の水を浴びたうえ、床に倒れたウンディーネの胸にはガラスの破片が突き刺さっていた。このシークエンスは、一方では黒いスーツをきっちり着こなし、ツンとすました頭のいい解説員であるウンディーネが、実は“水の精”「UNDINE」だったという設定にピッタリの情景だが、現実離れたファンタスティックな映像であり、ファンタスティックなストーリーであることは間違いない。しかして今、気を失っているウンディーネに対して、クリストフはいか

なる処置を・・・？

■□■新たな恋の行方は？おとぎ話は自由な発想で！■□■

“水の精”「UNDINE」について、パンフレットには次のとおり解説されている。すなわち、

「ウンディーネ」とはラテン語の「unda（波）」に由来し、人間との結婚によってのみ不滅の魂を得ることができる女性の形をした水の精霊。

ウンディーネをモチーフにした物語の多くは「愛する男が裏切ったとき、その男は命を奪われ、ウンディーネは水に還らなければならない」というストーリーラインで描かれている。

この「愛する男が裏切ったとき、その男は命を奪われ、ウンディーネは水に還らなければならない」というモチーフは、①アンデルセンの『人魚姫』（1837年）や、②チャイコフスキーのオペラ「ウンディーナ」（1869年）、③ドビュッシーの「前奏曲集」第2巻 第8曲「オンディーヌ」（1913年）、④劇団四季の「オンディーヌ」（1958年初演）、さらに、⑤手塚治虫の「七色いんこ」（第20話「オンディーヌ」（1981年）等々で幅広く、自由に伝えられている。つまり、「愛する男が裏切ったとき、その男は命を奪われ、ウンディーネは水に還らなければならない」というストーリーラインさえ守れば、小説・音楽・映画等々で描くウンディーネの物語は、自由な発想でオーケーということだ。

しかして、ペッツォルト監督は本作冒頭の「私を愛しているはず。私を捨てたら、あなたを殺すはめになる。知っているでしょ」というセリフでウンディーネの本性を明示した後、物語をドロドロしたヨハネスとの別れ話ではなく、クリストフとの恋物語に展開させていくから、それに注目！はじめて顔を合わせただけの2人がベッドインまで進む話はメチャ早い、それはクリストフが潜水作業員という仕事に従事していたから、“水の精”ウンディーネと相性が良かったため。しかし、クリストフにはモニカ（マリアム・ザリー）という恋人がおり、彼女はクリストフの潜水作業を手伝っていたから、そこには“三角関係”が生ずる可能性が。

さらに、ラブラブ状態で2人が手をつないで道を歩いている時、新たな恋人と手をつないで歩くヨハネスとすれ違ったところ、ウンディーネは？意外に繊細な神経を持つ（？）クリストフから、その時に起きた彼女の鼓動について質問（詰問）されたから、そこにも新たな危機が？さあ、ペッツォルト監督が自由な発想で描く“水の精”ウンディーネの新たな恋の行方は？

■□■水の中には危機がいっぱい！なぜこんな最悪の事態に？■□■

潜水作業員・クリストフが具体的にどんな仕事をしているのかはわからないが、その重装備ぶりを見ると、水の中がいかに危険かがよくわかる。クリストフがウンディーネと出会った後に湖の中で見る巨大なまずの“グンター”はご愛嬌だが、「UNDINE」の文字を見つけた瞬間に水の中で起きるさまざまな出来事は神秘的。もちろん、水中撮影（の技術）

は大変だから、それはペッツォルト監督の腕の見せ所だが、この展開の中でウンディーネがいかに“水の精”として神秘的な特性を持っているのかがわかってくるので、それにも注目！

また、恋に一途になっているウンディーネには女の恐さは微塵もなく、ただただクリストフとの幸せな恋にのめりこんでいるから、その姿にはいじらしさを感じてしまう。ところが、そんなウンディーネに対して、あの時あんなに冷たかったヨハネスは「彼女とは別れる。君の好きな湖に面した部屋を予約した。一緒に出かけよう」と復縁を迫ってきたから、アレレ。さらに間が悪いことに、その直後にクリストフから、今朝男とすれ違ったとき「男を見ただろ？君の鼓動を感じた」と告げられ、一方的に電話を切られたから、アレレ。そんなクリストフに対してウンディーネは、留守番電話に「私が待っていたのはあなた。今まででいちばん幸せ」とメッセージを残し、朝を待ってクリストフが暮らす街へと向かったが、そこでは脳死状態になったクリストフがベッドの上に横たわっていたから大変。さあ、ウンディーネはどうするの？

■□■潜水夫の人形は？クリストフの復活は？■□■

ちょっとした小道具がストーリー全体を牽引する映画は多い。しかして、本作では、冒頭のグラグラ揺れる大きな水槽の中に入っていた潜水夫の人形がその役割を果たすので、それに注目！ウンディーネはクリストフからプレゼントしてもらったそれを大切にしていたが、ある日、ちょっとしたはずみでそれを落とすとバラバラになってしまったからアレレ。接着剤でくっつけて元通りの状態にしたのはさすがだが、2人が仲違いしてしまうと・・・？

去る4月21日にはインドネシア海軍の潜水艦「KRI ナンガラ402」が沈没し、53人の乗組員全員が死亡するという大惨事が起きた。日本では1910年（明治43年）に起きた、旧海軍の第6潜水艇が瀬戸内海で遭難し、艇長の佐久間勉大尉ら14人の乗組員が全員死亡した惨事が有名だが、潜水夫もちょっとした事故で酸素が切れたら即死亡に至るのは仕方がない。したがって、ウンディーネが病院に駆けつけた時、既に“脳死”と判定されていたクリストフがその後、息を吹き返すことは現実にはあり得ないが、神話やおとぎ話なら・・・？しかして、本作ラストに向けて展開していく、更に自由な発想に基づく物語とは？

クリストフが息を吹き返し、復活することができたのは、ひょっとして“水の精”・ウンディーネが自分を裏切った男・ヨハネスを殺したため？そんなストーリー展開の中、あの潜水夫の人形は誰の手に？さあ、ギリシャ神話に起源を持つ“水の精”ウンディーネの神話をモチーフにしたペッツォルト監督の「精霊三部作」の第1作ラストの展開をタップリと楽しみたい。

2021（令和3）年4月29日記